

ひら いで めん うち だい い せき
平出免の内台遺跡

(第Ⅱ次調査)

平成30年6月

宇都宮市教育委員会

序

古代、うつのみやは河内郡に属し、池辺郷、大統郷、刑部郷、衣川駅家の諸郷があったと言われていました。このうちの衣川駅家は、古代の官道である東山道沿いに置かれた公的な施設の一つで、ここを通過して、多くの中央官人や軍隊が都と陸奥国を行き来していました。

昭和 63 年度に本県で初めて東山道と推定される遺跡が発見されて以来、現在までに多くの関連遺跡が確認されており、その点と点を結ぶことにより、おおよそ県内のどの辺りを東山道が通っていたかが分かってまいりました。

本市内においても東山道と推定される遺跡が確認されております。中でも、平成 4～5 年度に行われた南方約 120 m の上野遺跡の調査や、平成 22 年度に行われた調査では、東山道関連と考えられる溝が確認されており、今回調査で確認された溝はその延長線上にあることから、一連のものと考えられます。

今回、集合住宅の建設及び宅地造成工事に伴い影響を受けることになった本遺跡の取り扱いにつきましては、事業者をはじめ、関係機関と協議のうえ、記録保存のための発掘調査を実施することになりました。その結果、前述の東山道関連と推定される溝のほかに、古代の住居跡が確認され、東山道のルートの解明とともに、貴重な資料が得られたものと考えております。

本報告書は、発掘調査において得られた成果をまとめたものであり、多くの方がさまざまな面で広く活用いただきますことを期待するものであります。

最後になりましたが、埋蔵文化財の取り扱い協議から発掘調査、そして報告書作成・刊行に至るまで多大なるご協力とご理解をいただきました、地権者並びに関係各位に対しまして、厚く御礼申し上げます。

平成 30 年 6 月

宇都宮市教育委員会

教育長 水 越 久 夫

例 言

1. 本書は、栃木県宇都宮市平出町字上野に所在する「平出免の内台遺跡 第Ⅱ次調査」の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、石原秀子氏が施工する集合住宅建設に伴うもので、宇都宮市教育委員会の指導の下、事業者より委託を受けた株式会社 日本窯業史研究所が調査主体としてこれにあたった。
3. 野外調査は、平成 29 年 11 月 4 日より同年 11 月 26 日まで実施した。整理・報告書作成作業は調査終了直後に着手し、平成 30 年 6 月まで行った。

4. 調査組織

調査指導・宇都宮市教育委員会

文化課長 松本 邦夫

文化課文化財保護グループ係長 君島 直人

文化課文化財保護グループ指導主事 竹下 亘

調査主体者・株式会社 日本窯業史研究所

代表取締役 菅間 裕二

調査担当者 水野 順敏

(日本考古学協会員)

5. 本書の執筆は第 1 章第 1 節を竹下、他は水野が担当し、遺物・図面整理、編集は菅間智子の協力を得た。
6. 調査記録及び出土遺物は、宇都宮市教育委員会が保管している。
7. 野外調査及び整理・報告書作成作業において下記の関係機関・各位よりご助力とご指導を賜った。ご芳名を記して謝意を表する次第である。

石原秀子、栃木県教育委員会事務局文化財課、積水ハウス（株）宇都宮支店、（有）鈴木幸倫総合コンサルタント事務所、（株）星野組、今平利幸、木下実、中山晋、パーラ平成平出店

(敬称略、順不同)




8. 調査参加者

青木勝一、石川義夫、入江晴江、入江通子、小川征男、塩沢寿男、島田教子、島田麻季、

高山文雄、西村順雄、百瀬洋子、渡辺重夫

(敬称略、順不同)

凡 例

1. 本遺跡名の略号は、「HMN」で第Ⅱ次の「Ⅱ」を付して遺物注記等に使用した。また、遺構の略号は溝跡 = SD、竪穴建物跡 = SI、掘立柱建物跡 = SB、小穴 = P、性格不明遺構 = SX である。
2. 第 3 図は国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図「宇都宮東部」、第 16 図は宇都宮市発行の 2 千 5 百分の 1 都市計画図「92-1」を部分複製し加筆した。第 4 図は「上野遺跡」第 19 図に加筆した
3. 遺構図面の縮尺は、60 分の 1 を基本とし、遺構配置図 120 分の 1、カマド 30 分の 1 である。遺物は 3 分の 1 に統一した。遺物の番号は挿図、図版とも統一した。遺構図の K は攪乱、 はカマド構築材、 カマド、 黒色処理、土器断面の白抜は土師器、スミベタは須恵器、アミ掛けは灰軸陶器を示す。
4. 遺構図面上の北の方位は、座標北を示す。土層図等に示す数値は、海拔標高である。

目 次

序 例言 凡例 目次

第1章 調査に至る経緯と調査の経過	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査の方法と調査の経過	8
第3節 基本土層	8
第2章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3章 確認された遺構と遺物	13
第1節 溝跡	13
第2節 竪穴建物跡	19
第3節 掘立柱建物跡・小穴類	20
第4節 土坑類	20
第4章 総括	27
第1節 土地利用の変遷	27
第2節 遺構・遺物について	27
参考・引用文献	
写真図版	
報告書抄録・奥付	

挿 図 目 次

第1図 確認調査図 (1:300)	第10図 SD-3土層 (A・A'、B・B'、C・C'、 D・D')
第2図 基本土層図	第11図 SI-1・掘方、SI-1カマド・掘方
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡	第12図 SI-1出土遺物
第4図 東山道ルート推定図 (拠:『上野遺跡』第19図)	第13図 SB-1 (SK-3・6A・6B・7)・SB-2 (P-2・3)
第5図 調査区コンター図 (1:200)	第14図 小穴出土遺物
第6図 遺構配置図 (1:120)	第15図 SK-1・2・4・5・8、SX-1
第7図 SD-1土層 (A・A'、B・B'、C・C'、 D・D')	第16図 平出免の内台遺跡と上野遺跡 (拠:『上野遺跡』第1図)
第8図 溝跡出土遺物	
第9図 SD-2土層 (A・A'、B・B'、C・C'、 D・D')	

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表

第2表 溝跡出土遺物観察表

第3表 SI-1 出土遺物観察表

第4表 小穴出土遺物観察表

図 版 目 次

図版1 A. 調査区全景（北より） B. 調査区全景（南東より） C. SI-1完掘（南より） D. SI-1完掘（東より） E. SI-1東西土層（南より） F. SI-1掘方西半部（南より） G. SI-1カマド遺物出土状態（南より） H. SI-1カマド完掘（南より）

図版2 A. SI-1カマド掘方（南より） B. SI-1カマド東西土層（南より） C. SI-1遺物出土状態（北より） D. SI-1遺物出土状態（南西より） E. SD-1完掘（南より） F. SD-1完掘（北より） G. SD-1・1Tr土層（南より） H. SD-1・3Tr土層（南より）

図版3 A. SD-2完掘（南より） B. SD-2・1Tr土層（南より） C. SD-3完掘（北より） D. SD-3南北部完掘（北より） E. SD-3北東角（南西より） F. SD-3・1Tr土層（東より） G. SK-1完掘（東より） H. SK-3完掘（北より）

図版4 A. SK-4完掘（西より） B. SK-5土層・完掘（東より） C. SK-6A・B完掘（西より） D. SK-7完掘（南より） E. SK-8土層・完掘（東より） F. SX-1土層・完掘（南より） G. P-2・3完掘（西より） H. 基本土層（北より）

図版5 出土遺物

第1章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

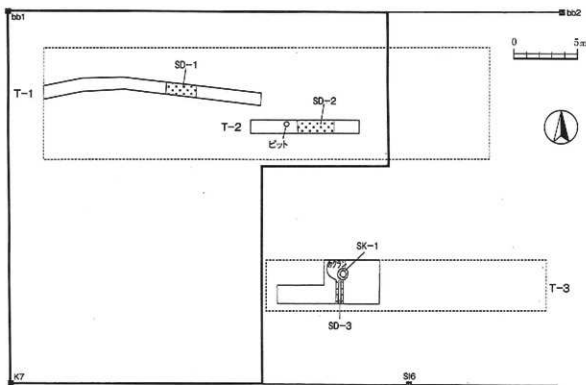
平成29年7月24日付けで、石原秀子氏より、宇都宮市平出町字上野4104番1の推定東山道内での、集合住宅建設に伴い、文化財保護法第93条の申請が提出された。同日付で市教育委員会文化課（以下、市文化課）から県教育委員会文化財課（以下、県文化財課）へ進達し、これに対し県文化財課より確認調査が必要である旨の指示が8月2日付けであったため、事業代理人であった（有）鈴木宰倫総合コンサルタント事務所を通じて、事業者と協議し、確認調査を実施することとなった。

確認調査は、9月26日～27日まで実施した。調査の方法は、開発区域内で集合住宅建設等により掘削が及ぶ範囲に幅1～15mの試掘溝を3本設定し（T-1～T-3）深さ40～80cmの表土部分を重機により掘り下げ、遺構の確認を行った。その結果、T-1で東山道の側溝と推定される溝跡が1条、T-2でも東山道の側溝と推定される溝跡が1条、T-3から土坑1基、時期不明の溝1条を確認した。確認調査の結果から、当地区の遺跡名を平成21年10月に行った発掘調査と同様に、平出免の内台遺跡とした。

調査結果を踏まえて、石原氏並びに代理人である（有）鈴木宰倫総合コンサルタント事務所と協議を行い、その後の対応を協議した結果、遺構が保護出来ない部分を本調査することとなった。また、敷地全体を大規模に造成する計画が持ち上がったため、協議の結果、造成部分も発掘調査が必要であるとの結論に至り、調査対象面積は集合住宅建設予定地に造成部分を加えた計720㎡となった。

その後、調査の担当者が（株）日本窯業史研究所と決まり、10月4日付で事業者である石原氏と宇都宮市教育委員会教育長水越久夫の間で調査に関する覚書を交わした。

発掘調査は、市文化課の指導の下、（株）日本窯業史研究所が調査主体者として行うこととなった。



第1図 確認調査図 (1:300)

—— 本調査範囲

第2節 調査の方法と調査の経過

調査は、平成29年11月3日に器材の搬入、調査区の位置出し、調査前写真の撮影等を行い、翌11月4日より重機による表土除去作業に着手した。11月6日から作業員が加わり、テントを設営の後、遺構確認作業に入る。確認した遺構のうち、溝跡は主軸に直交するトレンチによって土層観察・記録の後発掘作業に移った。堅穴建物跡は十文字、土坑・小穴等は半截により土層の観察・記録を行い、発掘して写真撮影・実測等の記録を行った。調査区画は、公共座標(世界測地系)に基づき5m方眼を設定し、X座標をアルファベット、Y座標をアラビア数字で示した。南西隅を原点とし、その座標値はX = 62575.000、Y = 9080.000を示す。写真記録は、35mm判の白黒・カラーリバーサルフィルムを使用し、デジタルカメラで補足した。撮影には三脚・大型脚立を使用した。平面実測は、縮尺20分の1で調査区全体を網羅し、光波距離計で計測、人手で方眼紙に作図、遺構配置図はこれを縮小した。土層図は縮尺20分の1、カマドは縮尺10分の1で作成、計測・作図とも人手で行った。

調査は、重機による表土除去作業を11月4日より同月9日まで行った。6日から人力による遺構確認作業と切株の処理に着手した。調査区中央部を南北に延びるSD-1、その東方約10mにやはり南北に延びるSD-2を確認した。さらに、SD-1の西脇約2.5mを並走するように延びるSD-3を確認したが、これは確認調査の際には確認されていなかった。SD-1・3は第I次調査区で確認されていたものの延長と判断されるが、SD-2は新規の確認である。また、第I次調査区よりSD-1の西脇を並走するように延びて来たSD-3は、調査区北端の手前約8mの所で直角に折れて西進することが判明した。さらに、SD-1の埋没後に構築されたSI-1が確認された。

11月6・17日に市教委による視察があり、同月24日には調査終了確認の立ち会いを受ける。翌25日は記録の補足、26日は記録の補足と器材の撤収を行い、全ての野外調査を終了した。

整理・報告書作成作業は、調査終了直後より着手し、断続的に作業を行い、平成30年6月に終了した。

第3節 基本土層

調査地点は岡本台地の東縁部に立地し、東側直下を山下川が南流する。台地は基本的には南と東側に向かって傾斜するが、今次調査区では北側に東から谷が嵌入することから北と東に向かって下降している。最も高い、南西隅の土層を図示(第2図、図版4H)した。なお、工事関係の掘削によれば、北東の台地縁辺部ではローム層の上位に七本桜・今市バミスの堆積、ローム層の下には礫層(径10～400mm)の存在が見られた。



第2図 基本土層図

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡は、栃木県宇都宮市平出町字上野地内に所在する。栃木県は関東平野の北端に位置し、東・西・北の三方山地に囲まれ、南方が平野部へと開けている。県都宇都宮市は、県域のほぼ中央に位置し、平出町はその中程に所在する。

遺跡は、市域の東寄りを南流する鬼怒川右岸の標高116～119m程の岡本台地東縁部に立地する。現在の鬼怒川まで約2.5km、台地の直下を山下川が南流し、その東に広がる沖積地との比高は6～9m程である。遺跡の立地する岡本台地は、市内岡本付近より南方の上三川町へと続く台地である。遺跡の西側一帯は昭和36～42年にかけて行われた、平出工業団地の造成工事によって旧地形が失われているものの、所々に浸食谷をもちながら東西幅2～3km程の平坦面が南に延びる。

交通的にはJR東北本線（宇都宮線）の宇都宮駅の東方約2.3kmに位置し、遺跡の東方約0.7kmを新4号国道が南北に延び、北方約2.8kmで国道4号と交差する。また、南方約8.5kmには北関東自動車道が東西に延び、前記の新4号国道と接してインターチェンジが設けられている。

第2節 歴史的環境

本遺跡周辺の周知の遺跡は第3図、第1表に示した如く、分布が非常に疎である。しかしこれは、本来の遺跡の分布状態を示すものではないと考えられる。本遺跡の西側の一帯は前述の通り工業団地の造成工事によって削平されており、これより西側の地区は旧い段階に市街化が進んだ為と推察される。事実、工業団地の造成に際し土器等の出土があったと伝えられる。

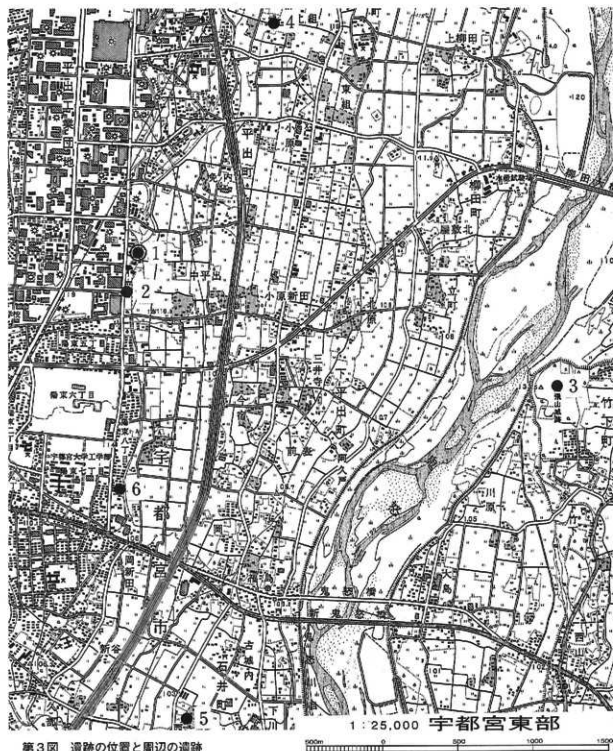
近隣の遺跡を概観すると以下の通りである。

旧石器時代 近隣における該期の資料の存在は管見には触れなかった。

縄文時代 本遺跡の第1次調査区では、早期頃と中・後期の土坑、中期後葉の竪穴建物跡1軒、南方約90mの上野遺跡第2次調査区では、小型の竪穴建物跡2軒と土坑等が確認され、前期～晩期にわたる土器片などが出土している。分布密度は薄いものの、該期の土地利用の一端が知られる。

弥生時代・古墳時代 近隣においてはこれらの時期の資料の存在も管見には触れなかった。

奈良・平安時代 律令制下における当地は、下野国河内郡に属していた。下野国は9郡（62郷）を管する東山道の上国である。下野国府は都賀郡に置かれ、当郡の郡家は南方の上三川と宇都宮市に跨がって所在する、国指定史跡上神主・茂原官衙遺跡及び上三川町の多功遺跡に比定される。なお、延喜式によれば、下野国内には5郡に7箇所（2）の駅家が所在し、河内郡内では「田部駅家」と「衣川駅家」の2箇所が設けられていた（第4図参照）。それぞれの比定地は諸説あるが、多功遺跡（ホ）や上神主・茂原官衙遺跡（ヘ）、多功南原遺跡などが想定されている。また、衣川駅家は、上野遺跡（第4図9）もしくはその東方直下の木の川遺跡付近を想定する向きもある。上野遺跡のⅠ・Ⅱ次調査で、道路側溝と見られる南北に延びる溝跡3条の他、円形有段土坑（所謂水室）1基、時期不明（古代と推定）1間×1間の掘立柱建物跡2棟などが確認された。また、本遺跡の第1次調査区では、上野遺跡第Ⅰ・Ⅱ次調査区の東側の溝跡（SD-1）の延長と判断される溝跡（SD-1）とこの西脇を並走するように延びるやや細い溝跡（SD-2）や平安時代の竪穴建物跡1軒などが確認された。なお、鬼怒川を隔てた東方約2.9kmの国指定史跡飛山城跡（リ）では「烽火家」の



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	主な時代					備考
		縄文	弥生	古墳	奈良・平安	中・近世	
1A	兔の内台遺跡第1次	●			●	●	古代東山道跡、集落跡
B	兔の内台遺跡第2次				●		古代東山道跡、集落跡
2	上野遺跡	●			●		古代東山道跡、集落跡
3	飛山城跡				●	●	中世城館跡、古代烽火
4	平出城跡					●	中世城館跡
5	石井城跡					●	中世城館跡
6	山下台高塚群					●	近世高塚群

掘書土器が出土した堅穴建物跡が確認されており、「飛山」の地名の由来と合わせ注目された。

なお、栃木県下では、北は那須町から南西の栃木市、南東の真岡市において計 27 所で道路跡と推定される遺構が確認・調査されている。これらのうち主なものを第 4 図に示したが、真岡市の鶴田 A 遺跡を除けばいずれも推定東山道関連の遺跡・遺構と見られ、本遺跡もその一角を占める。遺跡によっては数次の修治が確認され、長期間にわたる使用が判明している所もあるが、その他の地域においては時代によりルートの変更も予想される。

また、本県では未だ駅家跡と断定し得る遺跡が確認されておらず、課題の一つである。

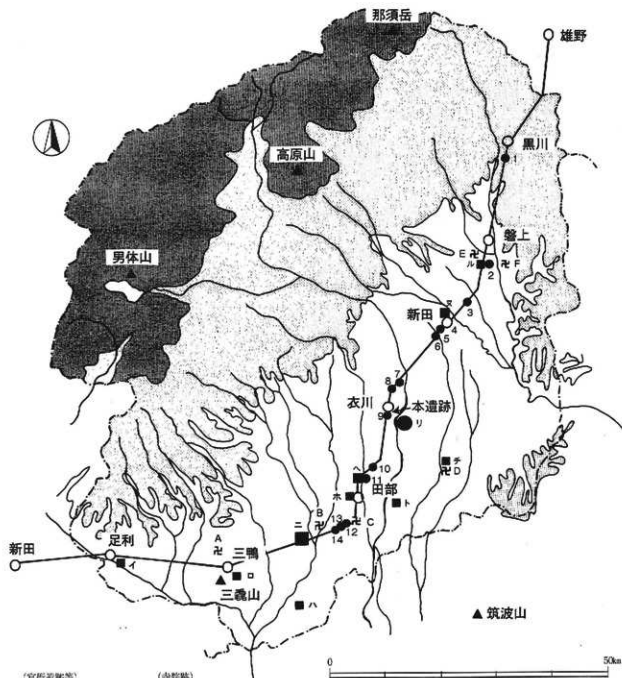
中世 宇都宮城の東方約 4.6km に位置する当地区は、この時代には宇都宮氏の領内にあり、前記の飛山城跡は重臣芳賀氏の拠点であった。また、鬼怒川右岸には北東の平出城跡（第 3 図 4）、南東の石井城跡（第 3 図 5）など宇都宮氏麾下の城館跡がほぼ一定間隔で配置されているようである。

近世 慶長 2（1597）年、宇都宮氏が豊臣秀吉によって改易される。当地は明治 4（1871）年まで近世を通じて宇都宮藩領であった。この間 10 度に及ぶ領主の交替が行われたが、最も長く宇都宮藩を治めたのは戸田氏で、途中 25 年間程の転封があるものの、2 次にわたり約 130 年間統治した。この辺は宇都宮城まで約 4.6km の距離にあり、のどかな田園地帯であったと推察される。当時は河内郡平出村（上・下平出村）に属し、幕末期の村高は 3,000 石程であった。本遺跡の第 I 次調査では、古代の道路側溝と考えられる SD-1 の上に径 10 m 程の塚が築かれていた。庶民の信仰の対象であったと見られ、多数のカワラケや奉養銭もしくは撒銭と思われる銭貨が出土した。既に移設されていた石塔類から当時流行していた日待ち・月待ちの信仰に関するものと推察された。また、本遺跡の南方約 1.5km の山下台高塚群（第 3 図 6）も同じ台地の東縁部に位置し、至近を古代の推定東山道が通じていたと推定されている。さらに、北北東約 6 km の日枝神社南遺跡（第 4 図 7）においても、推定東山道の側溝と見られる 2 条の並行する溝が確認され、そこでも近世の塚が調査されている。このように当地では古代道路跡と近世高塚との興味深い現象が認められる。

近代 当地は、現在山林となっているが、かつて耕作地であった可能性が高い。なお、第 I 次調査、今次調査においても、調査区内より焼夷弾の一部が複数出土している。昭和 20 年 7 月の所謂「宇都宮大空襲」に際して投下されたものと推定される。

参考・引用文献

1. 石川 均 1990 『日枝神社南遺跡・南古墳発掘調査報告書』河内町教育委員会
2. 宇都宮市教育委員会 1997 『宇都宮市埋蔵文化財地図』宇都宮市教育委員会
3. 宇都宮市教育委員会 2001 『うつのみやの空襲』宇都宮市教育委員会
4. 木本雅康 1996 「西 東山道-山坂を越えて-」『古代を考える古代道路』吉川弘文館
5. 今平利幸 1998 『上野遺跡』宇都宮市教育委員会
6. 今平利幸 1999 『飛山城Ⅲ』宇都宮市教育委員会
7. 中山 晋 1989 「付録 湯野山地区推定東山道確認調査概要」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報（昭和 63 年度）』栃木県教育委員会
8. 中山 晋 2016 「古代道路東山道」『とちぎを掘る 栃木の考古学の到達点』臨風社
9. シンゴジウム「古代国家とのろし」宇都宮市実行委員会・平川 南・鈴木増民編 1997 『峰【とふひ】の道』青木書店



- (官衙遺跡等)
- イ 国府野遺跡
 - ロ 外圃遺跡
 - ハ 千駄塚城跡遺跡
 - ニ 下野国府跡
 - ホ 多功遺跡
 - ヘ 上神主・茂原官衙遺跡
 - チ 中村遺跡
 - リ 堂山遺跡
 - ヌ 長者ヶ平官衙遺跡
 - ル 野原官衙遺跡

- (寺院跡)
- A 大慈寺跡
 - B 下野国分二寺跡
 - C 下野薬師寺跡
 - D 大内宿寺跡
 - E 善法寺薬師寺跡
 - F 尾の草履寺跡

鎌倉東山道確認遺跡(抄)

No.	遺跡名	所在地
1	ハッケントキ武跡	那須町
2	野原官衙遺跡	那須川町
3	新造平遺跡	那須烏山市
4	長者ヶ平官衙遺跡	那須烏山市
5	懸久保遺跡	那須烏山市
6	南原遺跡	さくら市
7	日枝神社南遺跡	宇都宮市
8	釜根遺跡	宇都宮市
9	上野遺跡	宇都宮市
10	砂村遺跡	宇都宮市
11	上神主・茂原官衙遺跡	宇都宮市上三田町
12	三の谷遺跡	下野市
13	諏訪山池遺跡	下野市
14	北台遺跡	下野市

第4図 東山道ルート推定図(拠:『上野遺跡』第19図)

第3章 確認された遺構と遺物

今次調査で確認された遺構は、古代の溝跡3条、竪穴建物跡1軒、掘立柱建物跡2棟、小穴3基（建物分除く）、土坑5基である。遺物は、奈良～平安時代の須恵器と土師器が出土し、墨書（墨痕）の見られるものが計5片認められた。

第1節 溝跡

溝跡は3条確認し、SD-1・2は南北に延びて南・北両端は地区外に延びる。SD-3は南側から北進し、西に折れて地区外に西進する。

SD-1（第5～8図、図版2・5、第2表）

遺構 調査区の中央を南北に延び、長さ約28mを確認した。上野遺跡第1次調査区より延びて今次調査区を縦断するもので、推定を含めた総長は約435mに及ぶ。断面観察より大きく2期以上の掘り直しが認められるとともに、9世紀後半代の竪穴建物跡に切られていた。

溝の上幅は、25～29m、底幅13～15m、深さ1～1.3mで、1・2期の断面は逆台形、3期の断面は皿状となる。調査区が傾斜地にあり、底面の南・北の比高は1.25cm程である。

埋積土は6層に分けられ、第6層は1期の底面を嵩上げて底面幅を広げた際の整地層で締まりが強い。また、3期に伴うと見られる第1・2層は、他の地区同様に締まりが強い。なお、今次調査においても、本跡の周辺に路面と見られる硬化面は確認されなかった。

遺物 埋積土の第1層中より、須恵器6片、土師器2片、灰釉陶器1片の9片が出土した。このうち、須恵器坏（1）・壺（3）、土師器甕（2）、灰釉陶器壺（4）を図示した。

SD-2（第5・6・8・9図、図版3・5、第2表）

遺構 調査区の北東部に所在、南北約12mを確認した。北と南は地区外に延びるが、南は約7.5m離れた、試掘調査の第3トレンチで確認されておらず、この間で止ると考えられる。中央やや北寄りではSK-1と重複し、これに切られていた。土層観察及び断面形状から2回以上の掘り直しが推定される。また、比較的急な斜面地に設けられたことによるものか、他と掘削の状況が異なる。当初は、平面が幅1m、長さ5～6mの細長い土坑状で、底面がほぼ水平な掘り込みを連続して掘り込んでいた。その後、設けられた2期の溝は、深さ0.9～1.2mと深く壁面が急角度なものになる。3期は幅が1.5～2.8mと広くなり、断面が皿状の浅いものとなる。2期の底面は地形に沿って下降し、南と北の比高は約1mである。

埋積土は前記の状況から観察位置により5～12層とまちまちであるが、3期に判断される上層は締まりが強い。

遺物 埋積土上層より土師器2片が出土し、坏1片（1）を図示した。

SD-3（第5・6・8・10図、図版3・5、第2表）

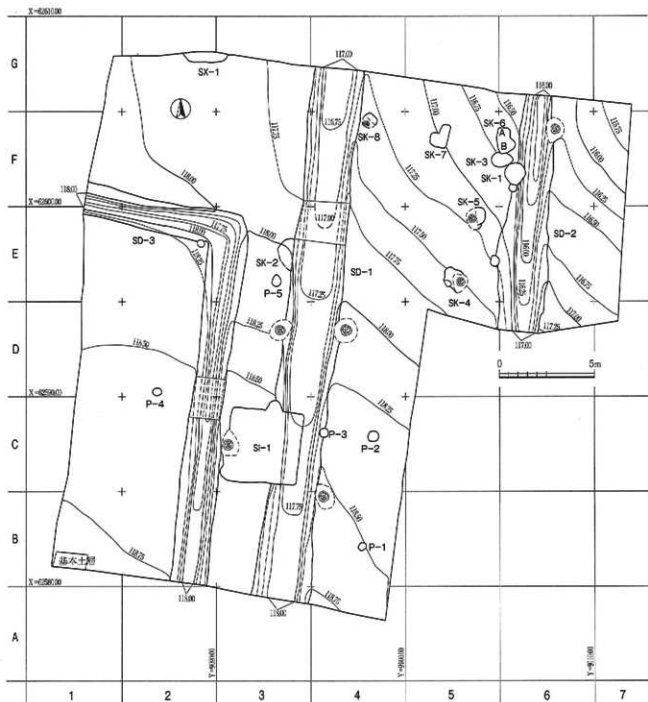
遺構 SD-1の西約2.5mを並走するような形で北に約20m延びた後、調査区北端の手前約8mでほぼ直角に折れて西進する。南・西端は調査区外に延びる。断面形状やSD-1との位置関係から第1次調査区のSD-2の延長と判断される。東辺の確認部総長（推定部分含む）は約64mで、北辺は約8mの確認である。

当初は道路側溝と考えられるSD-1に近接して並走するように認められたことから、道路関連の施設を想定したが、北辺が西に折れることから、何らかの区画を目的とした施設と推察される。

上幅1.6～1.9m、深さ0.9～1.1mで、狭い底面が認められる部分と、断面がV字型で不明瞭な部分とがある。底面の南北の比高は約50cmである。土層観察から2回以上の掘り直しが推定され、1・2期はV字型、3期は幅広で浅くなり、皿状の断面となる。

埋積土は5層に分けられ、他と同様に1・2層は締まりが強い。

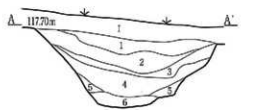
遺物 埋積土層より須恵器3片が出土し、坏1片(1)を図示した。



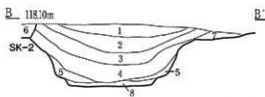
第5図 調査区コンター図(1:200)



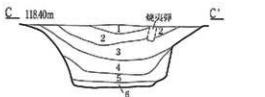
第6図 遺構配置図 (1:120)



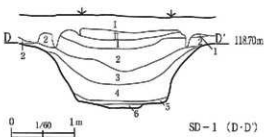
SD-1 (A-A')



SD-1 (B-B')



SD-1 (C-C')



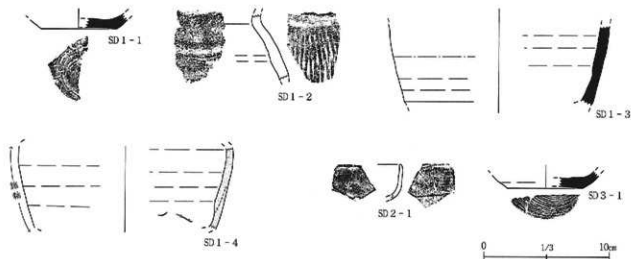
SD-1 (D-D')

SD-1

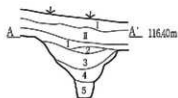
- (A-A') 1. 灰黄褐色土 (OYR5/2) 植物根多、締まり強い、灰土層
 2. 灰黄褐色土 (OYR5/2) 別褐色土 (OYR2/2) R-B (1-30mm) 15%、LR (1-3mm) 5%、SP (1-2mm) 炭粒含む、締まりあり
 3. 黒褐色土 (OYR3/2) 灰黄褐色土 (OYR4/2) R-B (1-30mm) 10%、LR (1-2mm) 3%、SP (1-2mm) 炭粒含む、締まり強い
 4. 暗褐色土 (OYR3/0) LR (1-2mm) 10%、L2.5-V.黄褐色土 (OYR5/2) R-B (1-30mm) 15%、SP (1-2mm) 炭粒含む、締まりあり
 5. 暗褐色土 (OYR3/0) L2.5-V.黄褐色土 (OYR5/2) R-B (1-30mm) 15%、LR (1-3mm) 5%含む、締まりあり
 6. L2.5-V.黄褐色土 (OYR5/2) LR-B (1-30mm) 20%含む、締まり強い
 7. L2.5-V.黄褐色土 (OYR5/2) 灰黄褐色土 (OYR4/2) R-B (1-30mm) 10%、LR-B (1-60mm) 40%含む、締まり強い、灰土層
- (B-B') 1. 暗褐色土 (OYR3/2) LR-B (1-25mm) 5%、SP-IP (1-10mm) 炭粒、L2.5-V.黄褐色土 (OYR5/2) 10%含む、締まり強い
 2. 黒褐色土 (OYR3/2) LR (1-2mm) 3%、SP-IP (1-2mm) 炭粒含む、締まり強い
 3. 灰黄褐色土 (OYR5/2) LR (1-2mm) 20%、L2.5-V.黄褐色土 (OYR5/0) 15%含む、締まりあり
 4. 黒褐色土 (OYR3/2) LR (1-3mm) 8%、L2.5-V.黄褐色土 (OYR5/2) 10%含む、締まりあり
 5. 灰黄褐色土 (OYR4/2) LR-B (1-30mm) 25%、黒褐色土 (OYR3/2) R-B (1-30mm) 15%含む、締まり強い
 6. 黒褐色土 (OYR3/2) 灰黄褐色土 (OYR4/2) R-B (1-30mm) 3%、LR-B (1-50mm) 3%、CR (1-10mm) 2%、黒色土 (OYR2/1) R-B (1-30mm) 20%含む、締まり強い (SK-2)
 7. 暗褐色土 (OYR3/0) LR (1-3mm) 5%含む、締まりあり
 8. 灰黄褐色土 (OYR5/2) LR-B (1-40mm) 50%含む、締まり強い (灰土層)

- (C-C') 1. 暗褐色土 (OYR3/0) LR-IP (1-2mm) 炭粒含む、締まり強い
 2. 暗褐色土 (OYR3/2) LR (1-2mm) 15%、SP-IP (1-2mm) 炭粒含む、締まり強い
 3. 暗褐色土 (OYR3/2) LR (1-2mm) 15%、IP (1-2mm) 炭粒含む、締まりあり
 4. 暗褐色土 (OYR3/2) LR (1-10mm) 10%、SP (1-5mm) 炭粒含む
 5. 灰黄褐色土 (OYR4/2) LR-B (1-40mm) 40%含む、締まり強い
 6. 灰黄褐色土 (OYR5/2) LR-B (1-40mm) 40%含む、締まり強い (灰土層)
- (D-D') 1. 暗褐色土 (OYR3/2) 締まり強い (耕作土)
 2. 暗褐色土 (OYR3/2) LR (1-3mm) 炭粒含む、締まりあり
 3. 暗褐色土 (OYR3/2) LR (1-10mm) 5%、灰黄褐色土 (OYR4/2) 20%含む、締まり強い
 4. 暗褐色土 (OYR3/2) LR (1-5mm) 3%、IP (1-5mm) 炭粒含む、締まり強い
 5. 暗褐色土 (OYR3/2) LR (1-5mm) 20%、SP (1-5mm) 炭粒含む、締まりあり
 6. 灰黄褐色土 (OYR4/2) LR-B (1-30mm) 35%、黒褐色土 (OYR3/2) R-B (1-25mm) 20%含む、締まりあり
 7. 灰黄褐色土 (OYR5/2) LR-B (1-40mm) 40%含む、締まり強い (灰土層)

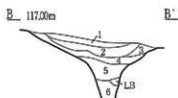
第7図 SD-1土層 (A-A'、B-B'、C-C'、D-D')



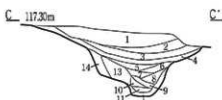
第8図 溝跡出土遺物



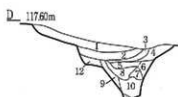
SD-2 (A-A')



SD-2 (B-B')



SD-2 (C-C')



SD-2 (D-D')

SD-2

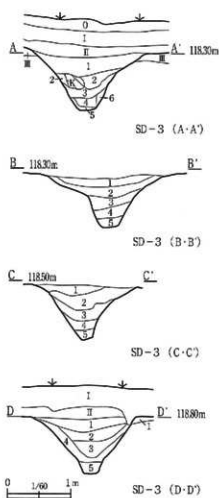
- (A-A') 1. 灰黄褐色土 (HYR6/2) 植物遺多、締まり強い
 2. 黒褐色土 (HYR2/2) 灰黄褐色土 (HYR5/2) B-B (1-30mm) 20% 含む、締まりあり
 3. 黒褐色土 (HYR2/2) LR (1-10mm) 8%, SP (1-5mm) 少量含む、締まり弱い
 4. 黒褐色土 (HYR2/2) LR-IP (1-2mm) 黄緑色含む
 5. 黒褐色土 (HYR2/2) 灰黄褐色土 (HYR5/2) B-B (1-30mm) 10%、LR (1-10mm) 5%、IP (1-5mm) 黄緑色含む、締まり強い
 6. 黒褐色土 (HYR2/2) LR (1-2mm) 少量、IP (1-5mm) 黄緑色含む、締まりあり
 7. 黒褐色土 (HYR2/2) LR-B (1-30mm) 15%、IP (5-30mm) 5% 含む、締まりあり
- (B-B') 1. 黒褐色土 (HYR2/2) LR (1-5mm) 黄緑色含む、締まり強い
 2. におい黄褐色土 (OYR6/2) LR-B (1-60mm) 45% 含む、締まり強い
 3. 灰黄褐色土 (HYR5/2) LR-B (1-20mm) 8% 含む、締まりあり
 4. 黒褐色土 (HYR2/2) LR-B (1-30mm) 10%、灰褐色土 (OYR4/2) B-B (1-30mm) 20% 含む、締まりあり
 5. 黒褐色土 (HYR2/2) LR (1-10mm) 5%、IP (1-5mm) 黄緑色含む、締まりあり
 6. 黒褐色土 (HYR2/2) LR-B (1-30mm) 20% 含む、締まりあり
- (C-C') 1. 暗褐色土 (HYR3/2) LR (1-2mm) 黄緑色含む、締まりあり
 2. におい黄褐色土 (OYR6/2) LR-B (1-25mm) 30%、黒褐色土 (HYR2/2) B-B (1-20mm) 15% 含む、締まり強い
 3. 黄褐色土 (OYR4/1) 灰黄褐色土 (HYR5/2) B-B (1-30mm) 25% 含む、締まり強い
 4. 灰黄褐色土 (HYR5/2) 黒褐色土 (HYR2/2) B-B (1-30mm) 15%、LR-B (1-20mm) 5% 含む、締まりあり
 5. 黒褐色土 (HYR2/2) LR (1-10mm) 8% 含む、締まりあり
 6. 暗褐色土 (HYR3/2) LR (1-10mm) 10% 含む、締まりあり
 7. 黒褐色土 (HYR2/2) LR (1-5mm) 5% 含む、締まりあり
 8. 灰黄褐色土 (HYR5/2) 黒褐色土 (HYR2/2) B-B (1-20mm) 10% 含む、締まりあり
 9. 暗褐色土 (HYR3/2) LR (1-10mm) 3% 含む、締まりあり
 10. 暗褐色土 (HYR3/2) LR (1-10mm) 8%、IP (1-5mm) 黄緑色含む、締まりあり
 11. 灰黄褐色土 (HYR5/2) LR (1-10mm) 20% 含む、締まりあり
 12. 暗褐色土 (HYR3/2) LR-B (1-40mm) 35%、黒褐色土 (HYR2/2) B-B (1-25mm) 5% 含む、締まりあり
 13. 暗褐色土 (HYR3/2) LR-B (1-40mm) 30%、黒褐色土 (HYR2/2) B-B (1-30mm) 15% 含む、締まりあり
 14. 暗褐色土 (HYR3/2) LR (1-10mm) 10% 含む、締まりあり
- (D-D') 1. 暗褐色土 (HYR3/2) LR (1-10mm) 15% 含む、締まりあり
 2. 灰黄褐色土 (HYR5/2) LR-B (1-40mm) 40%、灰黄褐色土 (HYR5/2) B-B (1-25mm) 10% 含む、締まり非常に強い
 3. 灰黄褐色土 (HYR5/2) LR-B (1-25mm) 15%、暗褐色土 (HYR2/2) B-B (1-20mm) 5% 含む、締まり強い
 4. 灰黄褐色土 (HYR5/2) 灰黄褐色土 (HYR5/2) B-B (1-20mm) 10% 含む、締まりあり
 5. 灰黄褐色土 (HYR5/2) LR (1-10mm) 20% 含む、締まりあり
 6. 灰黄褐色土 (HYR5/2) LR (1-10mm) 30% 含む、締まりあり
 7. におい黄褐色土 (OYR6/2) LR-B (1-20mm) 35% 含む、締まりあり
 8. 灰黄褐色土 (HYR5/2) LR (1-5mm) 8%、黒褐色土 (HYR2/2) B-B (1-10mm) 5% 含む、締まりあり
 9. におい黄褐色土 (OYR6/2) LR-B (1-30mm) 30%、黒褐色土 (HYR2/2) B-B (1-10mm) 5% 含む、締まりあり
 10. 灰黄褐色土 (HYR5/2) LR (1-10mm) 20%、黒褐色土 (HYR2/2) B-B (1-20mm) 5% 含む、締まりあり
 11. におい黄褐色土 (OYR6/2) ローム主体、におい黄褐色土 (HYR6/2) B-B (1-10mm) 8% 含む、締まりあり
 12. 暗褐色土 (HYR3/2) LR-B (1-30mm) 20% 含む、締まりあり

第9図 SD-2土層 (A-A'・B-B'・C-C'・D-D')

第2表 溝跡出土遺物観察表

() 測定値 [] 現存値

No	類別 器種	大きさ (cm) 口径・唇高・底径	遺存度	形状・手法等	胎土・焼成・色調	備考
SD1-1	灰志器 環	口径 唇高 [1.3] 底径 (6.0)	一部断片 底部30%	ロクロ整形、底部糸切り	胎土 白色砂、黒色発泡剤 焼成 普通 色調 内外 灰褐色 (25Y6/2)	中央部積土上層
SD1-2	土層器 壺	口径 唇高 [5.3] 底径 —	体部断片	内面横ヘラナデ、外面タキ	胎土 長石、白色、褐色 あかい 焼成 内外 におい黄褐色 (OYR7/4)	南郷積土上層 二次焼熟
SD1-3	灰志器 壺	口径 唇高 [6.3] 底径 —	体部断片	ロクロ整形、体部外面の下部ヘラ 削り、内面に筋状を認める	胎土 長石、黒色発泡剤 (豆つ 地成 色調 内 灰色 (7.5Y8/4)・外 灰褐色 (5YR 5/2)	南郷積土上層
SD1-4	灰志陶器 壺	口径 唇高 [6.6] 底径 —	体部断片	ロクロ整形、体部外面ヘラ削り、 体部下位に成形時の接合痕	胎土 軽黄 普通、唯は発色不良 焼成 普通 色調 内 灰白色 (2.5Y7/1)・外 灰白色 (10 Y8/2)	北黒積土上層
SD2-1	土層器 環	口径 唇高 [2.8] 底径 —	口辺・体部断片	輪轆み、内面と内辺外部筋ナデナ 仕上げ、体部外面ヘラ削り	胎土 細砂粒 普通 色調 内外 褐色 (5Y8/6)	北黒積土上層
SD3-1	灰志器 環	口径 唇高 [1.3] 底径 (6.1)	一部断片 底部30%	ロクロ整形、底部糸切り	胎土 砂・黒色 焼成 普通 色調 内外 灰褐色 (5Y8/1)	北東環積土上層



第10図 SD-3土層 (A-A'・B-B'・C-C'・D-D')

第2節 竪穴建物跡

今次調査区で確認された竪穴建物跡はSI-1が1軒のみである。

SI-1 (第11・12図、図版1・2・5、第3表)

遺構 調査区の中央やや南寄り、3C区に所在する。東側はSD-1と重複しこれを切る。平面形・規模は、一辺約3.8mの方形である。東壁はSD-1の埋積土中にあり平面観察では判然としなかった為、土層観察により判断した。壁は現存高25～30でほぼ直立する。壁下に壁溝を捉えることは出来なかった。床面は粗掘り後、ローム粒・塊を多く含む土で整地したもので、床面下に複数認められた。殊にSD-1との重複部分は床面下20cm程の所まで掘り下げ、ローム粒・塊混じりの土で整地してあったが、床面自体はロームによる貼床はまばらであった。柱穴は確認されなかった。

カマドは、北壁の中央やや東寄りに、幅120cm奥行き約70cmの逆U字状に掘り込み、灰白色粘土で築かれていた。また、北壁の位置が焚口と見られ、両袖部の先端には細長い河原石が芯軸として立てられた状態で遺存していた。さらに、カマドの中央には支脚用の河原石も原位置で遺存し、その先端には土師器台付甕の底部片(10B)が倒位で被せられていた。この支脚の手前より完形に近い須恵器杯(4)、東の壁際より胴部の一部を欠損した土師器甕(11)が出土した。移転に際する破壊儀礼によるものか。

SD-3

(A-A') 0. 雑土(イチョロ掘工事)

I. 灰濁色土(OHYR4/2) やや増まりあり(工事の副産物?)

II. 灰濁色土(OHYR3/2) LR(1～5mm)5%、Lに灰濁色土(OHYR4)R-B(1～30mm)15%含む、増まりあり

III. 黒褐色土(OHYR2/2) F(1～10mm)少量、LR(1～5mm)微量含む、増まりあり

1. 黒褐色土(OHYR3/2) 灰濁色土(OHYR2)R-B(1～30mm)20%、SP-IP(1～5mm)微量含む、増まりあり

2. 黒褐色土(OHYR3/4) 灰濁色土(OHYR2)R-B(1～30mm)25%、LR(1～10mm)5%、SP-IP(1～5mm)微量含む、増まりあり

3. 暗褐色土(OHYR3/4) 黒褐色土(OHYR2)R-B(1～30mm)20%、LR(1～10mm)10%含む、増まりあり

4. 暗褐色土(OHYR3/2) LR-B(1～30mm)25%、灰濁色土(OHYR2)R-B(1～25mm)15%含む、増まりあり

5. 黒褐色土(OHYR3/2) LR-B(1～50mm)25%、灰濁色土(OHYR2)R-B(1～25mm)20%含む

(B-B')

1. 黒褐色土(OHYR3/4) LR(1～5mm)・SP-IP(1～3mm)微量含む、増まりあり

2. 黒褐色土(OHYR3/2) LR-B(1～20mm)5%、SP-IP(1～3mm)微量含む、増まり非常に多い

3. 黒褐色土(OHYR3/2) LR(1～10mm)5%、SP-IP(1～2mm)微量含む、増まりあり

4. 黒褐色土(OHYR3/4) LR(1～10mm)微量含む、増まりあり

5. LR-B(1～60mm)主体、黒褐色土(OHYR3/2)40%含む、増まりあり(底層部)

(C-C')

1. 黒褐色土(OHYR3/4) LR(1～3mm)・SP-IP(1～2mm)微量含む、増まりあり

2. 黒褐色土(OHYR3/2) LR-B(1～30mm)20%、黒褐色土(OHYR3/4)R-B(1～40mm)8%、SP-IP(1～5mm)微量含む、増まり非常に多い

3. 暗褐色土(OHYR3/2) LR-B(1～30mm)15%、SP-IP(1～5mm)微量含む

4. 暗褐色土(OHYR3/2) LR-B(1～30mm)5%含む、増まりあり

5. 灰濁色土(OHYR4/2) LR(1～10mm)25%含む、増まりあり

(D-D')

1. 暗褐色土(OHYR3/4) 雑作土、増まり多い

II. 暗褐色土(OHYR3/2) LR(1～10mm)5%、灰濁色土(OHYR4/2)30%含む、増まり多い

1. 黒褐色土(OHYR3/2) LR(1～10mm)8%、SP-IP(1～5mm)微量含む、増まり多い

2. 暗褐色土(OHYR3/2) LR(1～10mm)20%、黒褐色土(OHYR3/2)R-B(1～30mm)15%含む、増まり多い

3. 黒褐色土(OHYR3/4) LR-B(1～50mm)20%、灰濁色土(OHYR2)R-B(1～40mm)20%含む、増まりあり

4. 暗褐色土(OHYR3/4) LR-B(1～30mm)10%、黒褐色土(OHYR3/2)R-B(1～30mm)15%含む、増まりあり

5. 暗褐色土(OHYR3/4) LR-B(1～30mm)15%含む、増まりあり

埋積土は7層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物 須恵器22点、土師器47点が出土し、須恵器坏(1~8)・寛(12)、土師器坏(9)・台付寛(10A・B)・寛(11)などを図示した。須恵器は坏類が主体で底部切離しが糸切りとヘラ起こしが混在し、胎土の違いからも複数産地のものが存在する。土師器は寛・台付寛が多く、主体は所謂武藏型であるが、下野型の破片や新治系の叩きを施したものも見られる。須恵器坏(1)は横位に「泉」、土師器坏(9)は倒位で「十万」もしくは「千万」の墨書が銘記されていた。この他にも釈読不可の細片が2片認められた。なお、1の坏は南東隅の床面直上より正位で出土しており、意図的に置き去ったものかと思われる。

本跡はこれらの遺物から9世紀後半代の所産と考えられる。

第3節 掘立柱建物跡・小穴類

今次調査区内より柱掘方・柱穴と考えられる遺構は8基確認した。これらは、径30~50cmの小型のもの(P-1~5)と、幅50~70cm、長さ110~125cm程の大型の2群である。残念ながら調査区内では、それぞれ1間分を想定したに過ぎない。

SB-1 (第13図、図版4C・D)

遺構 調査区北東部、5・6F区に所在する。当初は土坑を想定して、SK-3・6・7としたが、土層観察から大型の柱掘方と判断した。それぞれ、平面形が一様では無く、底面も2段以上に分かれ、最も深い部分に柱痕跡が認められた。SK-3は東端、SK-6は中程、SK-7は西端にあり、深さは65~80cmと確りしている。周辺に組み合わせる柱掘方が認められず、詳細は不明である。仮にSK-3とSK-7とすれば4.2m、SK-6とSK-7では3.8m程の間隔となる。また、いずれも柱は垂直ではなく、やや傾いて立てられていたと推定され、SK-3は西、SK-6は南、SK-7は東への傾斜が認められる。

遺物の出土は無かった。

SB-2 (第13・14図、図版4G・5、第4表)

遺構 調査区南東部、4C区に所在し、東西に約27m(約9尺)隔てて並ぶ。西はSD-1、SI-1と重複し、東は調査区外となりそれぞれの広がりには確認されなかった。南約5.6m(約19尺)のP-1と組み合わせる可能性も否めない。柱穴は径30~50cmの円形、深さ25~30cmであった。

遺物 P-3の埋積土中より須恵器の細片が2点出土し、うち1点(1)は墨書が認められるものの、釈読は出来なかった。

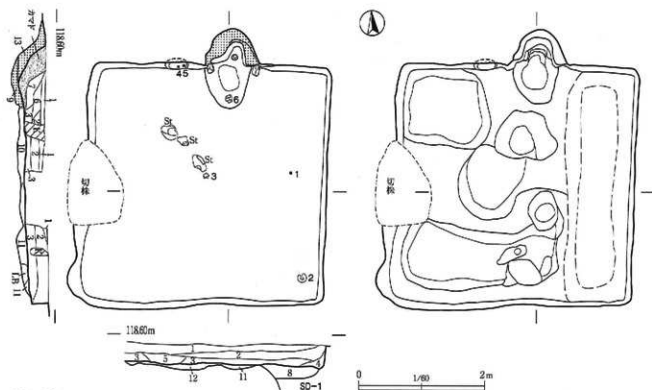
なお、P-4の埋積土からも須恵器坏の細片(1)が出土している。

第4節 土坑類

前記の通り当初は8基の土坑を想定したが、SK-3・6・7は柱掘方と見られる為除外し、土坑類は5基となった。しかし、これらのうち完掘出来たのはSK-1・2の2基で、他の3基は切株の真下において部分的調査に終わってしまった。性格不明遺構SX-1もここに含め報告する。

SK-1 (第15図、図版3G)

遺構 調査区北東部、6F区に所在する。SD-2と重複し、これを切る。平面形・規模は、開口部が径110

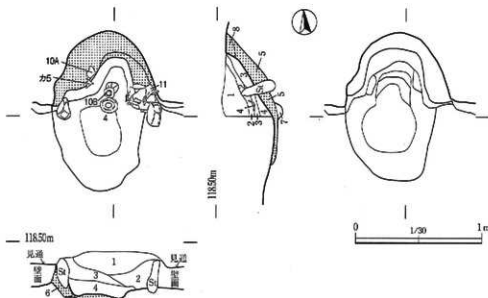


SI-1・掘方

1. 灰褐色土 (OYR4/1) LR (1 ~ 10mm) 3%, 灰黄褐色土 (OYR4/2) R-B (1 ~ 20mm) 20% 含む。埴まりあり
2. 灰黄褐色土 (OYR4/2) LR (1 ~ 10mm) 8%, SP・IP (1 ~ 5mm) 微量、褐色土 (OYR4/1) R-B (1 ~ 20mm) 15% 含む。埴まりあり
3. 灰黄褐色土 (OYR5/2) LR-B (1 ~ 20mm) 10%, 灰褐色土 (OYR4/1) R-B (1 ~ 20mm) 15% 含む。埴まりあり
4. 黒褐色土 (OY23/2) に近い黄褐色土 (OY23/3) R-B (1 ~ 20mm) 10%, SP・IP (1 ~ 10mm) 微量含む。埴まりあり
5. 灰黄褐色土 (OYR4/2) に近い黄褐色土 (OY23/3) R-B (1 ~ 20mm) 15%, LR (1 ~ 10mm) 10% 含む。埴まりあり
6. に近い灰褐色土 (OY23/4) 灰黄褐色土 (OY23/2) R-B (1 ~ 20mm) 20%, LR (1 ~ 10mm) 30%, SR (1 ~ 10mm) 微量含む。カマド跡残存。埴まりあり

7. 灰黄褐色土 (OY23/2) 灰黄褐色土 (OYR4/2) R-B (1 ~ 20mm) 30%, SR (1 ~ 10mm) 微量含む。カマド跡残存。6号との間に土層断片。埴まりあり
8. 暗褐色土 (OY23/2) LR-B (1 ~ 30mm) 25%, 赤褐色土 (OY23/2) R-B (1 ~ 30mm) 15%, 灰黄褐色土 (OY23/2) R-B (1 ~ 25mm) 20% 含む。埴まりあり。床面厚土
9. 暗褐色土 (OY23/4) LR-B (1 ~ 30mm) 20% 含む。埴まりあり。9号と同じ方跡出土
10. 暗褐色土 (OY23/3) LR-B (1 ~ 50mm) 25%, 黒褐色土 (OY23/2) R-B (1 ~ 30mm) 10% 含む。埴まり強い。床面厚土
11. 黒褐色土 (OY23/2) LR-B (1 ~ 40mm) 30%, 灰黄褐色土 (OYR4/2) R-B (1 ~ 30mm) 15% 含む。埴まり強い。床面厚土
12. 灰黄褐色土 (OYR4/2) LR-B (1 ~ 20mm) 20%, 赤褐色土 (OY23/2) R-B (1 ~ 30mm) 15% 含む。埴まり強い。床面厚土
13. 灰褐色土 (OY23/4) LR-B (1 ~ 25mm) 8%, SR (1 ~ 5mm) 2% 含む。埴まりあり。カマド跡残存

SI-1・掘方



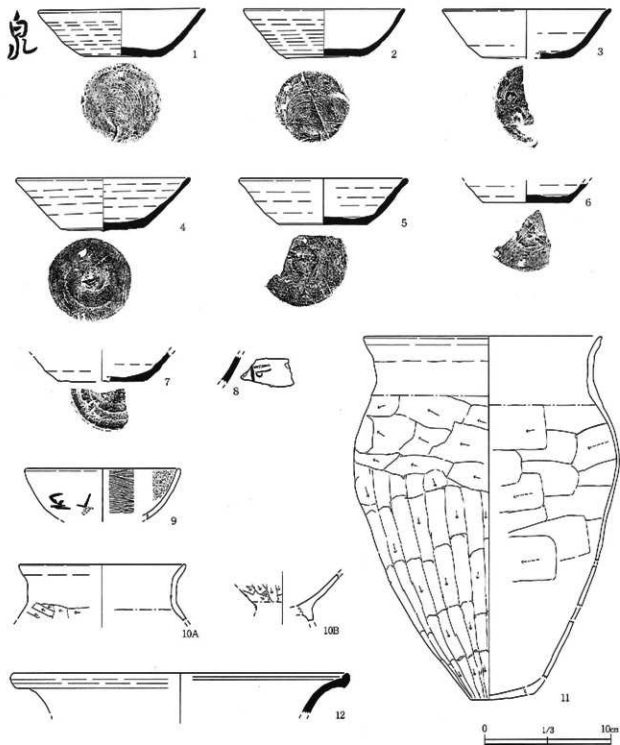
SI-1・カマド

1. 黒褐色土 (OY23/2) LR (1 ~ 5mm) 10%, 褐色土 (OY26/4) R-B (1 ~ 20mm) 10%, SR (1 ~ 5mm) 微量含む。埴まりあり
2. 赤褐色土 (OYR4/1) LR-B (1 ~ 20mm) 8%, SR (1 ~ 5mm) 5% 含む。埴まりあり
3. に近い褐色土 (OY23/4) SR (1 ~ 10mm) 10%, 黒褐色土 (OY23/2) R (1 ~ 10mm) 3% 含む。埴まりあり
4. に近い褐色土 (OY23/4) SR-B (1 ~ 20mm) 10%, に近い褐色土 (OY23/4) R-B (1 ~ 20mm) 5% 含む。埴まりあり

5. 灰黄褐色土 (OYR4/2) LR-B (1 ~ 25mm) 8%, SR (1 ~ 5mm) 2% 含む。埴まりあり。床面厚土
6. 明灰褐色土 (OYR5/2) に近い黄褐色土 (OY23/4) R (1 ~ 10mm) 15%, SR (1 ~ 2mm) 微量含む。埴まりあり。跡層材
7. 赤褐色土 (OY23/1) LR-B (1 ~ 30mm) 20%, SR (1 ~ 2mm) 微量含む。埴まりあり
8. 灰黄褐色土 (OY23/2) SR (1 ~ 5mm) 8%, LR (1 ~ 10mm) 5% 含む。埴まりあり

SI-1カマド・掘方

第11図 SI-1・掘方、SI-1カマド・掘方

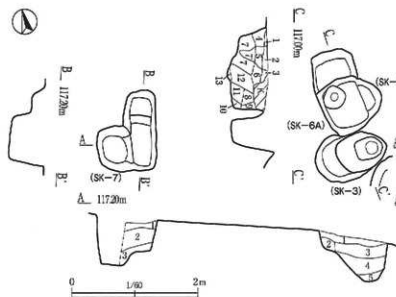


第 12 圖 S-1 出土遺物

第3表 SI-1 出土遺物観察表

() 推定値 [] 現存値

No.	種別 器種	大きさ (cm) 口径・器高・底径	遺存度	形状・手法等	胎土・焼成・色調	備考
1	須恵器 環	口径 13.2 器高 3.8 底径 6.6	95%	ロクロ整形、底部糸切り、体部外面ロクロ目多	胎土 白色、褐色粒、長石 焼成 ややあまい 色調 内外 褐色(10YR5/1)、内面 黄褐色(10YR7/3)	No.2 体部外面磨削(打痕)痕状
2	須恵器 環	口径 12.8 器高 3.7 底径 5.9	70%	ロクロ整形、底部糸切り、体部外面ロクロ目多	胎土 白色粒、長石 焼成 ややあまい 色調 内外 褐色(10YR2/1)、一部 黄褐色(10YR7/3)	2区遺物
3	須恵器 環	口径 (13.6) 器高 (3.9) 底径 (7.4)	30% 口辺～底部	ロクロ整形、底部糸切り	胎土 長石、チャート 焼成 ややあまい 色調 内外 黄褐色(10YR7/2)・(10YR7/3)	No.3 二次焼熱
4	須恵器 環	口径 13.6 器高 4.3 底径 6.6	75%	ロクロ整形、底部へら起こし後ナデ、底縁重ね焼による変色	胎土 長石、白色粒 焼成 良好 色調 内外 体部背黒色(SB12/1)、底部灰赤色(2.5YR5/2)	カNo.2 底部内外面磨削
5	須恵器 環	口径 (13.2) 器高 (3.2) 底径 (7.2)	35% 口辺～底部	ロクロ整形、底部へら起こし後ナデ、板目状圧痕	胎土 長石、白色粒 焼成 良好 色調 内外 灰色(SY4/1)、靑灰色(7.5Y34/1)	3区遺物、1-2区面質土 底部外面へら起こし(打痕)、 胎土面、見込み部分磨削
6	須恵器 環	口径 [1.6] 器高 [7.0]	20% 体・底部	ロクロ整形、底部へら起こし	胎土 長石、チャート、断面に白色の薄い層を認める 焼成 良好 色調 内外 黄褐色(2.5Y4/1)	1区埋積土 胎土面へら起こし「×」、 胎土面
7	須恵器 環	口径 [1.2] 器高 [6.8]	20% 体・底部	ロクロ整形、底部へら起こし、体・底部の境に沈線跡	胎土 長石、チャート、断面に白色の薄い層を認める 焼成 良好 色調 内外 灰色(7.5Y5/1)	3区埋積土 胎土面
8	須恵器 環	口径 [2.1] 器高 [2.1]	体部断片	ロクロ整形	胎土 長石、白色粒 焼成 良好 色調 内外 灰色(5Y5/1)	1区埋積土 体部外面磨削、不詳
9	土師器 台付甕	口径 (12.2) 器高 [4.1] 底径 [] (場合で必ず)	口辺・体部の 40%遺存	ロクロ整形、内面ミガキ、黒色施埋	胎土 白色粒、長石、チャート 焼成 良好 色調 内外 灰色(5Y5/1)	1区埋積土、体部器高 No.19、底位、内面磨削無く 使用痕跡
10A	土師器 台付甕	口径 (13.2) 器高 [4.4] 底径 []	口辺・体部断片	輪積み、口辺部内外面横ナデ仕上げ、体部外面横ナデ仕上げ、体部外面横ナデ仕上げ、内内面横ナデ仕上げ	胎土 粗砂・褐色粒 焼成 普通 色調 内外 明赤褐色(2.5YR5/6)	カNo.4、1区埋積土 二次焼熱により胎土の質 れ目立つ
10B	土師器 台付甕	口径 [4.7] 器高 [] 底径 []	体部・台部 断片	輪積み、体部外面へら磨り、他は器面の磨れ著しく不詳	胎土 石英、長石、褐色粒 焼成 普通 色調 内外 褐色(7.5YR5/6)・外に黄褐色(5YR7/3)	カNo.3、支脚部材に 二次焼熱により器面磨れる
11	土師器 甕	口径 19.0 器高 20.0 底径 (4.9)	70%	輪積み、口辺部内外面横ナデ仕上げ、体部外面上位横、中下位横へら磨り、体・底部内面へらナデ、底部外面へら磨り	胎土 長石、褐色粒 焼成 良好 色調 内外 褐色(2.5YR5/6)、一部黒褐色(5YR2/1)	カNo.1
12	須恵器 甕	口径 (26.8) 器高 [3.2] 底径 []	口辺部断片	ロクロ整形、口縁内側に折り返す	胎土 石英、白色粒、雲母細片 焼成 普通(ややあまい) 色調 内外 褐色(10YR3/1)・外 黒色(10YR1/1)	1区埋積土



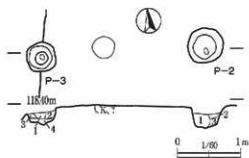
第1 (SK-7, A-A') 2

1. 灰黄褐色土 (OY35)2 LR-B (1-10mm) 8%、黑褐色土 (OY23)2 R-B (1-10mm) 3% 含心、埋まりあり
2. 灰黄褐色土 (OY35)2 LR-B (1-50mm) 15%、黑褐色土 (OY23)2 R-B (1-40mm) 10% 含心、埋まりあり
3. 黑褐色土 (OY23)2 LR-B (1-40mm) 25%、灰黄褐色土 (OY35)2 R-B (1-30mm) 20% 含心、埋まりあり

第1 (SK-3, A-A') 2

1. 黄褐色土 (OY34)2 LR (1-2mm)・SP・P (1-3mm) 少量含心、埋まりあり
2. 黑褐色土 (OY23)2 LR (1-5mm) 少量含心、埋まりあり
3. 黑褐色土 (OY23)2 LR-B (1-40mm) 15% 含心、埋まりあり
4. 黄褐色土 (OY35)2 LR-B (1-20mm) 5% 含心、埋まりあり
5. 灰黄褐色土 (OY35)2 LR-B (1-30mm) 15% 含心、埋まりあり

SB-1 (SK-3・6A・6B・7)



SB-2 (P-2)

1. 黑褐色土 (OY23)2 LR (1-10mm) 3% 含心、埋まりあり
2. 黑褐色土 (OY23)2 LR-B (1-20mm) 25% 含心、埋まりあり
3. 灰黄褐色土 (OY35)2 LR-B (1-30mm) 25% 含心、埋まりあり

SB-2 (P-3)

1. 黑褐色土 (OY23)2 LR (1-5mm) 3% 含心、埋まりあり
2. 黑褐色土 (OY23)2 LR-B (1-20mm) 25% 含心、埋まりあり
3. 灰黄褐色土 (OY35)2 LR-B (1-40mm) 30% 含心、埋まりあり
4. 灰黄褐色土 (OY35)2 LR-B (1-40mm) 25% 含心、埋まりあり

SB-2 (P-2・3)

第13图 SB-1 (SK-3・6A・6B・7)・SB-2 (P-2・3)



第14图 小穴出土遺物

第4表 小穴出土遺物観察表

() 推定値 | | 取存値

No	種別		大きさ (cm)	遺存現	形状・手法等	胎土・焼成・色調	備考
	器種	口径・器高・底径					
P-3 (SB-2)	須臾器	口径 器高 底径	— [2.2] —	体部断片	ロク口塗彩	胎土 雑砂、黒色発泡質 焼成 普通 色調 内外 灰白色 (257/1)	埋積土 体部外面凹凸、不淨
	須臾器 坏	口径 器高 底径	— [2.8] —	口辺部断片	ロク口塗彩	胎土 長石、白色砂、黒色発泡質 焼成 普通 色調 内外 灰黄色 (257/2)	埋積土

～115cmのほぼ円形、深さ15～25cm、壁は外傾し、底面は平坦であった。埋積土は2層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

SK-2 (第15図)

遺構 調査区の中央やや北寄りの3E区に所在する。東側がSD-1と重複し、これを切る。平面形・規模は、開口部が約105～170cmの不整楕円形、深さ15～20cm、壁は東が急傾斜であるが他はなだらかで、底面はほぼ平坦であった。埋積土は単層で自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

SK-4 (第15図、図版4A)

遺構 調査区北東部、5E区に所在する。南東部は切株の直下であり調査し得なかった。平面形・規模は、前記の状況により明確にし難いが、開口部は南北長140cm、現存東西長110cmの楕円形と推定される。深さ25～30cm、壁は直立ぎみに立ち上がり、底面はほぼ平坦であった。埋積土は4層に分けられ、南西部に後世の掘り込みが認められた。

遺物 埋積土中より土師器が2片出土したが、図示し得るものは無かった。

SK-5 (第15図、図版4B)

遺構 調査区北東部、5E区に所在する。西半部は切株の直下であり調査し得なかった。平面形・規模は、前記の状況により明確にし難いが、開口部は南北長約94cm、現存東西長約48cmの円形と推定される。深さ約40cm、壁はほぼ直立し、底面は平坦であった。埋積土は3層に分けられ、自然埋没と考えられる。

遺物の出土は無かった。

SK-8 (第15図、図版4E)

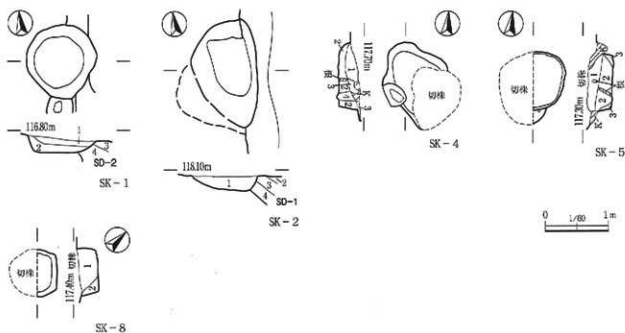
遺構 調査区北端の中程、4F区に所在する。南西部は切株の直下であり調査し得なかった。平面形・規模は、前記の状況により明確にし難いが、開口部は北西・南東長約76cm、現存北東・南西長約31cmの丸味を帯びた方形と推定され、深さ約30cm、壁はほぼ直立し、底面は平坦であった。埋積土は2層に分けられ、自然埋没である。

遺物の出土は無かった。

SX-1 (第15図、図版4F)

遺構 調査区北端の中央やや西寄り、2・3G区に跨がって所在する。大部分が調査区外にあって南端の極一部を確認したに過ぎない。現存東西長約2.4m、同南北長約55cm、深さ50cm以上、壁は外傾する。他の土坑類に比べ著しく大型であり性格不明遺構としたが、規模的には円形有段土坑や井戸跡等の外縁部の可能性を想定したい。埋積土は現状で3層確認したが、詳細は不明である。

遺物の出土は無かった。



SK-1

1. 灰黄褐色土 (OYB4/2) LR-B(1~30mm)8%含む、締まりあり
2. 褐色土 (OYB1/1) LR(1~3mm)・黒褐色土 (OYB2/2) R(1~10mm)3%、灰黄褐色土 (OYB4/2) R-B(1~30mm)20%含む、締まりあり
3. 黒褐色土 (OYB2/2) 灰黄褐色土 (OYB4/2) R(1~10mm)15%含む、締まり強い (SD-2)
4. 黒褐色土 (OYB2/1) LR(1~10mm)20%含む、締まり強い (SD-2)

SK-2

1. 黒褐色土 (OYB2/2) 灰黄褐色土 (OYB4/2) R-B(1~30mm)5%、LR-B(1~30mm)3%、CR(1~10mm)2%、黒褐色土 (OYB2/2) R-B(1~30mm)20%含む、締まり強い
2. 黒褐色土 (OYB2/2) LR(1~2mm)3%、SP-IP(1~2mm)炭屑含む、締まり強い (SD-1)
3. 灰黄褐色土 (OYB4/2) LR(1~2mm)20%、に赤い黄褐色土 (OYB5/2) 15%含む、締まりあり (SD-1)
4. 黒褐色土 (OYB2/1) LR(1~3mm)8%、に赤い黄褐色土 (OYB5/2) 10%含む、締まりあり (SD-1)

SK-4

1. 黒褐色土 (OYB2/2) LR(1~10mm)10%含む、締まりあり
2. 褐色土 (OYB1/2) LR(1~10mm)20%含む、締まりあり
3. 正褐色土 (OYB2/2) LR-B(1~20mm)35%含む、締まりあり
4. 灰黄褐色土 (OYB4/2) LR-B(1~30mm)25%含む、締まりあり

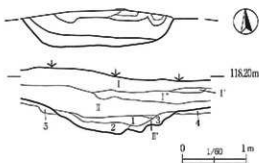
SK-5

1. 灰黄褐色土 (OYB4/2) LR(1~10mm)8%含む、締まりあり
2. 正褐色土 (OYB2/2) LR-B(1~20mm)15%、灰黄褐色土 (OYB4/2) R-B(1~20mm)15%含む、締まりあり
3. に赤い黄褐色土 (OYB4/2) LR-B(1~20mm)25%含む、締まりあり

SK-8

1. 正褐色土 (OYB2/2) LR-B(1~30mm)15%含む、締まりあり
2. 正褐色土 (OYB2/2) LR(1~10mm)3%含む、締まりあり

SK-1・2・4・5・8



SK-1

1. 灰黄褐色土 (OYB4/2) LR(1~5mm)炭屑含む、植物残多、締まり強い、炭土層
- I' に赤い黄褐色土 (OYB5/2) 褐色土 (OYB1/2) R-B(1~20mm)25%含む、締まりあり
- II' 褐色土 (OYB1/2) LR(1~3mm)炭屑含む、締まり強い
- III' 黒褐色土 (OYB2/2) LR(1~5mm)8%、SP-IP(1~3mm)炭屑含む、締まりあり
- IV' 黒褐色土 (OYB2/1) LR(1~3mm)10%含む、締まりあり
1. 黒褐色土 (OYB2/2) 黒褐色土 (OYB2/2) R-B(1~30mm)15%、LR(1~10mm)10%含む、締まりあり
2. 灰黄褐色土 (OYB4/2) に赤い黄褐色土 (OYB5/2) R-B(1~30mm)15%、LR(1~3mm)5%含む、締まりあり
3. に赤い黄褐色土 (OYB4/2) LR-B(1~30mm)30%含む、締まりあり
4. 褐色土 (OYB1/2) LR-B(1~5mm)20%含む、締まりあり
5. 黒褐色土 (OYB2/2) LR(1~10mm)25%含む、締まりあり

SK-1

第15図 SK-1・2・4・5・8、SX-1

第4章 総括

第1節 土地利用の変遷

旧石器時代 本遺跡及び近隣では該期の遺構・遺物とも管見にふれたものは無かった。

縄文時代 今次調査区では遺構・遺物とも確認されなかったが、第Ⅰ次調査区においては、早・前期頃、中期末葉、後期の土坑、中期後葉の竪穴建物跡1軒などが確認され、前期～晩期にわたる土器片が少量出土した。また、南に隣接する上野遺跡第Ⅱ次調査区でも小型の竪穴建物跡が2軒確認され、早期から晩期にわたる土器片等が出土している。このように、台地縁辺部に小規模な集落の形成が認められる。

弥生・古墳時代 これらの時代においても本遺跡では土地利用の形跡は認められなかった。しかし、前述の如く西側一帯は未調査のまま工業団地の造成が行われており、全く存在しなかったか否かは判然としない。

奈良・平安時代 本遺跡及び南の上野遺跡においても、この時代が調査対象の主体であった。その中心となるのが、推定東山道の側溝である。南に隣接する上野遺跡第Ⅰ次調査区で2条、同第Ⅱ次調査区で3条の溝跡が確認されている。これらのうち、東端に位置するSD-1の延長と見られる溝跡が本遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査区でも確認されており、推定部分を含めた総延長は約435mに及ぶ。また、この溝跡が、南端ではSD-2と平行に延びるが、北に向かうに従い、東に逸れてしまう状況が確認された。当地付近に「衣川駅家」を比定する説もあることから、道幅の広がりや「駅家」の存在の可能性が推測されている。なお、本遺跡においては前記のSD-1の西約2mに併走するように設けられた細い溝跡が確認された。今次調査では、その北端がほぼ直角に折れて西進することが判明した。また、新たにSD-1の東方約10mの台地縁辺部に、南北に延びる溝跡が確認されるとともに、SD-1を切って構築された平安時代の竪穴建物跡も認められた。

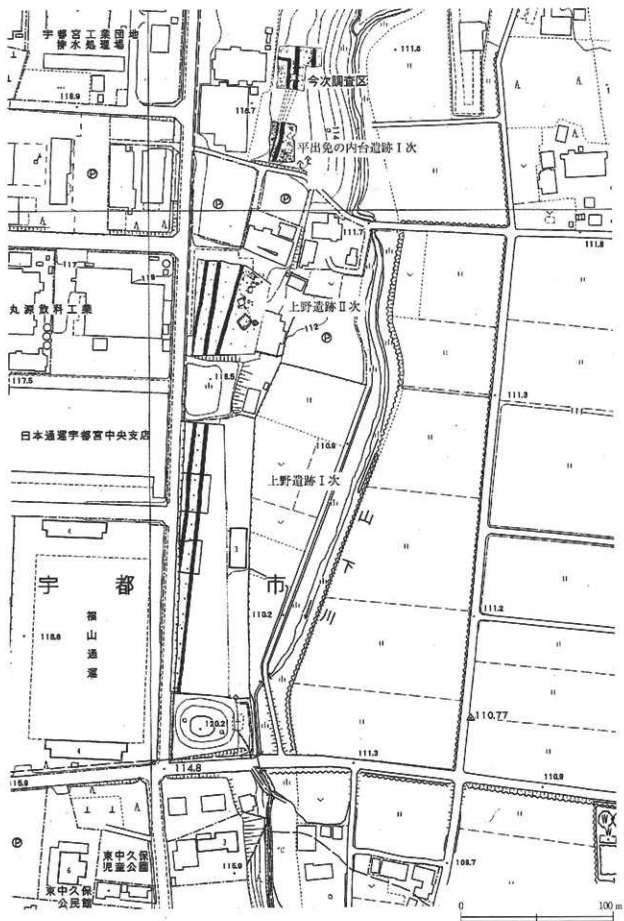
中世 この時代は宇都宮氏の勢力下にあり東方の鬼怒川沿いには、麾下の平出城跡、石井城跡などが所在するものの、本遺跡内において土地利用の形跡は確認されなかった。

近世 この時代は河内郡平出村として、宇都宮藩領であった。今次調査区では、遺構・遺物とも確認出来なかったが、第Ⅰ次調査区では庶民の信仰の対象として築かれた「免の内台1号塚」が確認された。調査の着手前に移設された石塔類から、当時流行していた日待ち、月待ちの信仰に関わるものと推察された。また、塚上からは多数の土師質土器皿や内耳土器の他、奉養銭もしくは撒銭と推察される銭貨が出土した。遺物は江戸期を中心とするものの、渡来銭や近代の銭貨も認められ、長い期間にわたる信仰が推測される。

近・現代 今次調査区は、数十年前に針葉樹が植栽された造成林であったが、第Ⅰ次調査区は前述の塚の背景として直径50～70cmの雑木が繁る雑木林であった。なお、この辺はアジア・太平洋戦争後に宇都宮市に編入されたような田園地帯であるが、アメリカ軍の空襲を受けていたことが確認された。第Ⅰ・Ⅱ次調査区で、それぞれ2箇所づつ焼夷弾の投下を確認されている。昭和20(1945)年7月12日深夜～13日未明の所謂宇都宮大空襲の痕跡と推察される。土地利用の痕跡では無いものの、忌しい歴史の一コマとして記録に留める。

第2節 遺構・遺物について

古代 溝跡は3条確認したが、前述の通りSD-1は確認状況及び近隣での調査成果から、推定東山道の側溝の可能性が高い。しかし、他の2条は規模・形状及び本遺跡にのみ認められることから、道路側溝とは異なる施設と考えられる。



第16図 平出免の内台遺跡と上野遺跡
(拠: 『上野遺跡』第1図)

SD-1は南方の上野遺跡第Ⅰ次調査区から今調査区まで約435mにわたって続き、それぞれ南と北へさらに延びる。また、上野遺跡第Ⅰ次調査区で2条、同Ⅱ次調査区で3条の類似の溝跡が確認されており、第Ⅰ次調査区では西隣のSD-2と併走するように延びるが、北側の第Ⅱ次調査区に到るとSD-1はひとり東寄りに延びて、SD-2との間隔が徐々に広がるのが確認されている。本遺跡では、第Ⅰ・Ⅱ次調査区ともSD-1のみの確認であり、SD-2との位置関係は判然としない。しかし、逆の上野遺跡では認められなかった細いV字溝が第Ⅰ次調査区で1条、第Ⅱ次調査区で2条確認された。両地区に跨がって確認された西側の溝跡(第Ⅰ次のSD-2、第Ⅱ次のSD-3)は、北端では直角に折れて西進することが判明した。第Ⅰ次調査区ではSD-1の西側に約2m(芯心では約3m)隔てて併走するように所在し、類似の埋没変遷を示すことから、道路関連の施設の可能性も推測された。しかし、前述の通り第Ⅱ次調査区では併走せずに西に折れることから、何らかの区画施設の可能性が生じた。SD-1が東側の道路側溝とした場合、その西に溝による区画が存在するとすれば、道路幅員の減少や移設に伴ってその機能を停止したことになる。また、今調査区で新たに確認された東方約10mを南北に延びる溝跡(SD-2)は、北は調査区外に延びるが南は確認調査の結果から今調査区の南端(東は南がやや狭い)より10m以内の所から始まると判断された。地境付近の工事に伴う掘削からも、南に延びていないことが確認されている。この溝跡も規模・形状がSD-1の西側の溝(SD-3)と類似することから、同様の性格の施設と推察されるが、両者の先後関係は明確にし難い。但し、このSD-2がSD-1の東側の台地縁辺部に設けられることからすれば、SD-1に関連する施設の可能性がある。これに対し、SD-3はSD-1の機能停止後に設けられた可能性が高いことから、こちらが後出の感が強い。

なお、前述の上野遺跡第Ⅱ次調査区においてはSD-1の東側にのみ該期の遺構が認められたが、本遺跡ではSD-1の両側にわたって該期の遺構が所在した。殊に、今調査区では、9世紀後半代と考えられる竪穴建物跡がSD-1の埋没後に構築されており、SD-1の下限を捉えることが出来たことは、今調査の成果の一つと言えよう。また、この竪穴建物跡の床面直上より、「泉」の墨書が銘記されたほぼ完形の須恵器片が正位で出土しており、意図的な安置を推察させる。中山晋氏のご教示によれば「泉」の墨書土器は、道路跡周辺より出土の例が多いとのことであるが、本跡もその一例となろうか。この他、埴積土中より「千□」の墨書銘の記された土師器片が出土し、本跡及び至近の小穴内より釋読出来ないものの、墨痕の認められる須恵器細片が認められた。文字資料は多いが施設名を示唆するものは無い。

今調査区の北東部において、一辺70cm以上の楕円形もしくは長方形の比較的大型の柱掘形状のものを4基確認した。残念ながら2辺3本の推定に止るものの、いずれも柱が内傾するように建てられたと推察され、柱間が3.8～4.2mと非常に広い。類似の施設は第Ⅰ次調査、上野遺跡第Ⅱ次調査でも確認されており、通常の掘立柱建物では無く、櫓の性格の施設の可能性があるが、いずれもSD-1の東側に所在した。これに関連して想起されるのが、本遺跡と鬼怒川を隔てた東方約2.9kmに所在する国指定史跡飛山城跡の存在である。ここは、宇都宮氏の重臣芳賀氏の拠点で、遺存状態の良好なことから史跡として整備されて利・活用が図られている。さらに、ここで注目されたのは「飛山」という地名と「烽家^{トウノカ}」と記された墨書土器の出土である。古代の烽家の実態は定では無いが、古代官道と烽家の密接な関係を示唆するものとして興味深い(今平:1999)。鬼怒川左岸に占地するこの城跡と本遺跡の間には網島低地が広がり、遠望は頗る良好である。なお、延々と続く東山道に沿ってこれほど近接して各所に望櫓が設けられていたとは考え難く、至近にこれらを必要とする施設の存在が推察される。

かねてより、上野遺跡の調査者はこの周辺に「衣川駅家」の存在を指摘している(今平:1998)が、さら

に渡川点に近い日枝神社南遺跡付近に比定する向きもある（木本：1996）。

今次調査においても「衣川駅家」の所在を確認することは出来なかった。しかし、SD-1の西に所在する溝SD-3による区画は、現存南北長が65m以上に及び、埋没の変遷などからも一般集落の伴うものとは考え難い。県内の郡家遺跡等に見られる区画溝に比べると、規模的には貧弱な感を受けるが、現時点では公的施設に伴う区画施設と考えたい。

近代 昭和20（1945）年、未だ70余年前のことであり、発掘調査報告書の頁を割くべき事が躊躇したが、古代の遺構・遺物については他の遺跡においても記述があろうが、この事象については本遺跡の特色の一つとして略記する。

本遺跡の第Ⅰ・Ⅱ次調査区において各2箇所、計4箇所の焼夷弾の落下を確認した。アジア・太平洋戦争当時、アメリカ軍によって投下されたもので、1点はSD-1の埋積土、他の3点は地山のローム層に突き刺さった状態で出土した。これらは、調査前に行った重機による表土除去作業によって大部分が削平され、下端の20cm程が遺存したに過ぎない。しかし、今次調査区では表面採集という形で、ほぼ完形のもの1点認められたことから、他も本来は土中にほぼ完全な形で埋没していた可能性が高い。

宇都宮市における空襲所謂「宇都宮大空襲」は、昭和20（1945）年7月12日23時19分より13日1時39分頃までの約2時間20分の長時間にわたるものであった。これにより市街地の90%程が焼失し、約8万戸が被災したと言われる。この際投下されたのが、M47焼夷弾とE46集束焼夷弾で、E46はM69小型焼夷弾を38箇束ねたものである。出土資料は、このM69型と考えられる。高度約4,000mで投下されたE46集束焼夷弾は、高度約1,500mで分散し、15m間隔で落下するよう調整されていた。M69は、地上に落下の衝撃で信管が作動して中に詰まっている油脂（ナバーム）に火がついて吹き出す構造で、その際、上部の蓋をはね飛ばすとされる（宇都宮市教育委員会 2001）。採集資料は全長70cm、一辺5.5cmの六角柱状で、蓋が遺存し、外面は未だ銀色に光沢をもっていた。ナバームが吹き出す際に蓋をはね飛ばされなかったが、上部側面にナバームの吹き出した跡と見られる錆びた孔が認められた。なお、第Ⅰ次調査区では、北東・南西方向に約12m隔てて確認され、第Ⅱ次調査区では東西に約4mと近接して認められた。また、第Ⅰ次調査区の2点と今次調査区の2点は南北長36～41mの距離にある。爆撃機は市域に南方から進入し、東方へ帰ったと推定されることから両者は別々の米軍機（B29）より投下された可能性が高い。

第Ⅰ次調査当時の事業主であった故石原一男氏の談によれば「水田からその東側の集落にかけて数十発の焼夷弾が落下した」、同家の北に隣接する（調査区の東約150m）「新宅の屋根にも着弾したがそれは家人が消火した」とのことである。

この辺は、アジア・太平洋戦争後に宇都宮市に編入されたような、のどかな田園地帯であり、当時第Ⅰ次調査区は塚の背景となる雑木林、第Ⅱ次調査区は畑地であったと思われる。このような所まで空襲の対象とされたことは驚くが、これが意図的なものか、単に帰路の燃料の消耗を避ける為、残りの積荷（焼夷弾）を投下していっただけなのかは判然としない。ただ、調査地点の南方約800mには軍需工場の一つである日本製鋼所宇都宮作業場が所在したこともその一因であろうか。

本書の上梓にあたり、調査に対してご理解を賜りました事業主石原秀子氏はじめ、調査及び整理・報告書作成に対してご助力とご指導を賜った諸機関ならびに各位に感謝致し執筆する。



A. 調査区全景 (北より)



B. 調査区全景 (南東より)



C. SI-1完掘 (南より)



D. SI-1完掘 (東より)



E. SI-1東西土層 (南より)



F. SI-1掘方西半部 (南より)

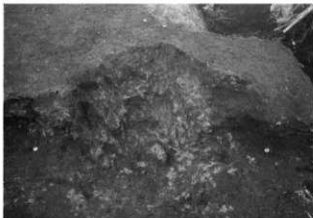


G. SI-1カマド遺物出土状態 (南より)



H. SI-1カマド完掘 (南より)

図版 2



A. SI-1カマド掘方(南より)



B. SI-1カマド東西土層(南より)



C. SI-1遺物出土状態(北より)



D. SI-1遺物出土状態(南西より)



E. SD-1完掘(南より)



F. SD-1完掘(北より)



G. SD-1・1Tr土層(南より)



H. SD-1・3Tr土層(南より)



A. SD-2完掘 (南より)



B. SD-2・1Tr土層 (南より)



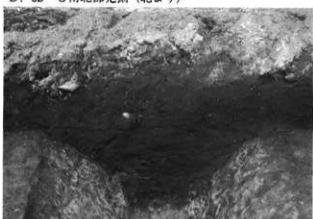
C. SD-3完掘 (北より)



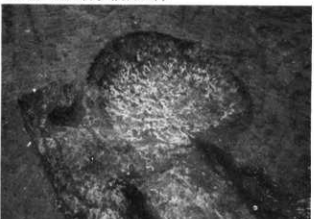
D. SD-3南北部完掘 (北より)



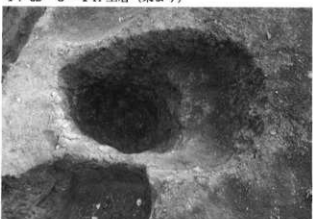
E. SD-3北東角 (南西より)



F. SD-3・1Tr土層 (東より)



G. SK-1完掘 (東より)



H. SK-3完掘 (北より)

図版 4



A. SK-4完掘(西より)



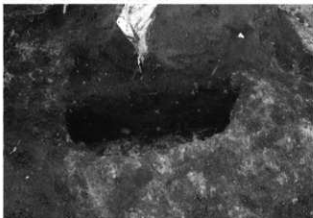
B. SK-5土層・完掘(東より)



C. SK-6A・B完掘(西より)



D. SK-7完掘(南より)



E. SK-8土層・完掘(東より)



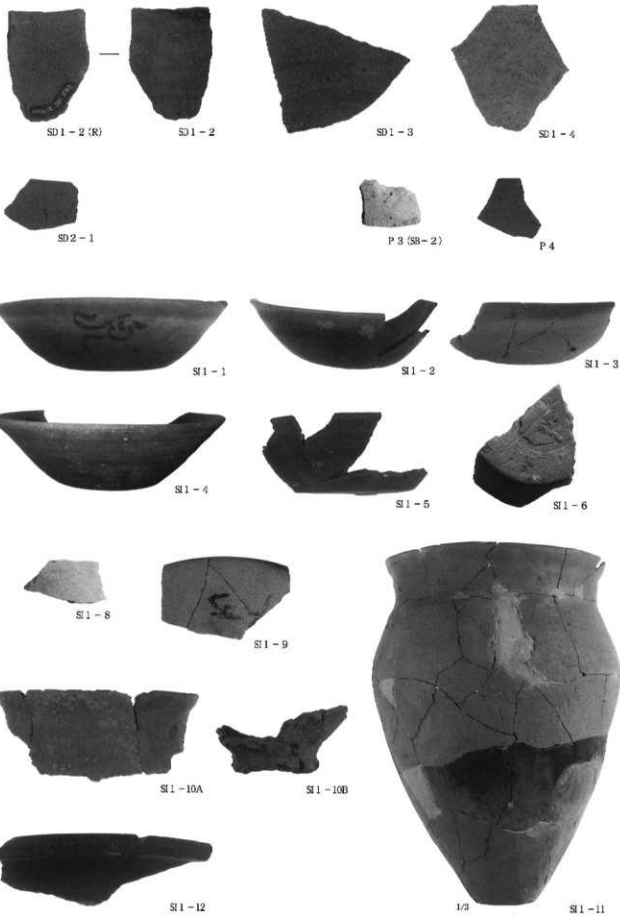
F. SK-1土層・完掘(南より)



G. P-2・3完掘(西より)



H. 基本土層(北より)



出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	ひらいでめん うちだいいせき だいにじちようき							
書名	平出免の内台遺跡（第Ⅱ次調査）							
副書名								
巻次								
シリーズ名	宇都宮市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第101集							
編著者名	竹下 亘・水野順敏							
編集機関	株式会社 日本産業史研究所							
所在地	〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112 TEL 0287-93-0711							
発行機関	宇都宮市教育委員会							
所在地	〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5 TEL 028-632-2764							
発行年月日	西暦2018（平成30）年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ひらいでめん うちだいいせき 平出免の内台遺跡 だいにじちようき (第Ⅱ次調査)	うつのみや しひらいでまちあざづわの 宇都宮市平出町字上野	9201	3294	36° 33' 51"	139° 56' 8"	20171104) 20171126	720㎡	集合住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平出免の内台遺跡 (第Ⅱ次調査)	道路跡	・奈良・平安時代 ・近・現代	・溝跡 3条 ・堅穴建物跡 1軒 ・竪立柱建物跡 2棟 ・土坑 8基 ・性格不明遺構 1基	・土師器、須恵器 ・焼夷弾		・確認された3条の 溝跡のうちSD-1 は、推定東山道の 側溝と考えられる。 この溝に重複する 平安時代の堅穴建 物跡を確認した。		
要 約	・南の上野遺跡より約435mにわたって延びるSD-1は、推定東山道の東側の側溝と見られるもので、これに重複して構築された平安時代のSI-1を確認した。この重複関係から、SD-1の下限を確認できた。							

宇都宮市埋蔵文化財調査報告書第101集

平出免の内台遺跡（第Ⅱ次調査）

発行年月日 2018（平成30）年6月30日

編 集 株式会社 日本産業史研究所
〒324-0611 栃木県那須郡那珂川町小砂3112
TEL 0287-93-0711

発 行 宇都宮市教育委員会文化課
〒320-8540 栃木県宇都宮市旭1-1-5
TEL 028-632-2764

印 刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
〒321-0904 栃木県宇都宮市陽東5-9-21
TEL 028-662-2511